

比にひきずられて、その「環境」には、自然環境のみならず国際的環境（＝相対位置）なども明瞭な区別のないまま含まれている（たとえば pp. 41-42, 115-116, 174）。「環境決定論」をこの様に使うことは、時に便利ではあるものの、地理学思想史においては誤解の余地がある。空間的相対位置＝立地の問題が1920～30年代の米国において反環境論の一つの根拠であったことから、この点は無視しえない。

4. 著者は各々の時代の地政学思想をその社会的背景の中に位置づけようとしており、また各思想が実際の政治にいかなる影響を与えたかにも触れている。しかし、それらは簡単な状況証拠の提示に留まり、厳密な証明をなしていない。政治に対する影響という問題は、政治家自身が自己の地政学思想を發展させた場合もあるので、本書のような形の議論でもあるいは十分であろう。しかし文脈における位置付けという問題は、単なる着想の平行性を指摘するだけでは足りない。各論者の思想的準拠集団を確定し、それとの関係で文脈の影響を跡付ける必要がある。

5. 著者は理論・テーマの変化の原因としては、対象もしくは価値観（実践上の目標）の変化だけを考へて、理論内部での発達・転換という要因は無視ないし軽視しているようである（pp 179-181）。そのためであろうか、一つのテーマにおける議論の展開ないしは發展（換言すれば異見間の関連付け）が明確でなく、多くの議論は単に羅列されているに過ぎない。「地政学界」という共通の議論の場が欠如もしくは脆弱である以上、種々の見解の交流可能性を安直に前提することは不適切ではある。しかしそれだけにかえて、どのような形で交流が行われているかを明らかにせねばなるまい。

6. 先に紹介した地政学の分類は、空間的（形態的）基準と非空間的基準とが混用されているために、有効な枠組みをなしていない。著者の見方を基本的に踏襲するとしても、形態（円弧・円環・不定形）と極の数（二極・多極）との2基準によって6類型を区分の方が適切であろう。この場合、中心／周辺論（二極）と多極理論（多極）とは「不定形」に属する。著者自身はこの範疇を立てていないのでその考へを知る由もないが、国際政治の全地球的パターンが不定形である（すなわち、明確な空間的構造を示さない）ということは、（著者の定義する）地政学の存立基盤が崩壊したことを意味するのではなか

ろうか。

7. 末尾の用語解説には、56語（そのうち独語28、英語22、仏語3、その他3）が収められている。便利ではあるが、「電撃戦」、'ecumene'、'pays'などの語まで含むのは不適切であろう。

〔注〕

- 1) マッキンダー、H. J.（曾村保信訳）『デモクラシーの理想と現実』原書房、1985、第3章。
- 2) 上掲1)第4章、およびマッキンダー、H. J.（曾村保信訳）「地理学からみた歴史の回転軸」上掲書所収、pp. 251～284。

（立岡裕士）

菊池万雄編 近世都市の社会史

名著出版 1987年3月

A5判 326ページ 2,500円

近年、歴史学の分野において、アナル学派の影響を承けた「社会史」の諸研究が、隆盛となっている。本書のタイトルに明示されている「社会史」は、その研究視座とは異なっている。この意味でも、アナル学派の「社会史」との関連について、まえがきにおいて若干みられるものの、歴史地理学における「社会史」の研究視点などに関して詳細な論述の必要性を、本書への要望としてまず第一に指摘しておきたい。

さて、本書の構成は次のとおりである。

第1章：歴史が語る都市

- 第1節 歴史が語る都市—解題
- 第2節 歴史が語る都市—考証
- 第3節 歴史が語る都市—残照

第2章：災害と近世都市

- 第1節 明暦の大火と江戸の開港
- 第2節 飢饉と救恤—仙台藩を例として
- 第3節 津波に洗われた島原の町

第3章：現代に生きる近世都市

- 第1節 都市生活と環境
- 第2節 近世都市から現代都市へ

第4章：統計が語る都市生活

- 第1節 人口動態
- 第2節 生産と消費
- 第3節 流通

補章：古文書解説

第1章の「歴史が語る都市」は、解題・考証・残

照の3つの節に分かれている。まず、解題は城下町、宿場町、港町、門前町、市場町など機能の異なる近世都市について記述され、近世都市の把握への導入となっている。次の考証は、近世都市の形態、人口動態、都市圏などの分析手法について古絵図、地図、古文書、過去帳を使用しつつ明らかにしている。古文書と過去帳を分離したのは、近世都市を分析する資料として過去帳の重要性を強調するためと思われる。この点は、第2章第3節の「津波に洗われた島原の町」とともに、編者が長年携わってきた過去帳分析の蓄積が、十二分に活かされているところでもある。残照においては、古絵図と現在の都市景観とを対比しつつ、現代都市に生きる近世都市の景観を明らかにし、第3章「現代に生きる近世都市」への導線の役割も果たしている。

第2章「災害と近世都市」では、火災・飢饉・津波を対象に、江戸・仙台・島原をフィールドとして、それぞれの被害の復元、自然環境との関連、幕府あるいは藩の諸政策、そして現代都市への反映について詳説されている。

第3章の「現代に生きる近世都市」においては、まず第1節で、都市生活を営むために重要であった水環境を江戸を中心にしながらも、ロンドンやパリなどの外国の諸都市と比較し、都市生活の浮き彫りに留意しつつ論述が進められている。この節の記述は、歴史学の「社会史」と一脈を通じるものがあるように思われる。さらに、東京・大阪・名古屋・横浜・神戸・札幌の都心および刈谷・豊川・日立の核心地を確定し、その変遷と新旧の比較を通して、現代都市の基盤としての近世都市を明確にしている。

次の第4章「統計が語る都市生活」は江戸時代および明治初年の統計資料を用いて、全国・南部藩・江戸のそれぞれの人口動態、江戸周辺の生産および消費、全国の流通に関して論述が進められている。

流通に関しては、いわゆる三都を中心とした流通構造のみならず、諸藩の流通構造や在郷町の形成に伴う流通構造の変革についても触れられてきたかった。

補章の「古文書読解」は、地方文書として宗門帳・明細帳・検地帳・災害史料および町方文書を提示し、近世都市研究への基礎技術の習得の役割を果たしている。しかし、印刷の都合であろうか、古文書1・古文書2・古文書20のように不鮮明であったり、古文書4のように消し字が記入されたりし、初心者のみならずとも解読の困難な史料があげられているのは、初学者が歴史地理学から逃避してしまうのではないかと心配される。また、細かな点ではあるが、本文中でも印刷不鮮明な図（たとえば、図1-2-8）や凡例がなく理解困難な図（たとえば、図1-2-16や図1-2-17）、図版の入れ違い（図1-3-2-2と図1-3-2-1）、古文書の誤読（p. 293 古文書1の「藤本左太夫子」は「岡本左太夫子」、p. 294 古文書3の「非人=」は「非人等=」、p. 72 古文書1の「霊岩嶋」は「霊岸嶋」）もみうけられる。

もっとも、補章のみならず本文中において、多くの古文書・古絵図・地図・写真とともに『江戸名所図絵』、『名所江戸百景』、『むさしあふみ』などから当時の都市景観や生活の様相が具体的に示され、本文の記述の理解を容易にしている点は、本書の特徴の一つでもある。さらに、資料に基づいて作成された図を眺めながら、読者独自の図の作成を試みつつ本書を読まれば、分布図・密度図などの図作成法の演習にもなる。

本文を読むにしても、図版や資料を眺めるにしても、とにかく楽しく読破できる近世都市への誘いの良いテキストである。一読をお勧めしたい。

（古田悦造）